

中国の歴史教科書における「抗日戦争」

— 記述の変遷とその背景に関する考察（上） —

弓 削 俊 洋

1. はじめに

中国の歴史教科書¹⁾では「抗日戦争」を重要な学習項目として位置づけている。特に自国史の教科書にはその特徴が顕著に表われており、1995年版中学校教科書『中国歴史』第四冊（P 2 資料 1 ⑤参照）では60頁、全体の四分の一を割いて詳述している程である。

本稿ではこの「抗日戦争」について、主に記述の変遷（量的、質的变化）という視点から分析していくが、変化の内容をより鮮明にするために、検討にあたっては出来るだけ対象を絞ることにした。

第一は「抗日戦争」の期間である。中国の教科書においては、1931年「九一八事変（満州事変）」から1945年までを指す場合と、1937年「七七事変（盧溝橋事件）」から1945年までを指す場合とに分かれているが²⁾、本稿では後者、1937年から1945年までの期間を「抗日戦争」と呼ぶこととしたい。

第二に、「抗日戦争」の何を考察するかである。どの教科書も基本的に「日本軍による侵略」「国民党の対日政策」「共産党および人民の抗戦」を柱に記述してあるが、本稿では日本（軍）がどのように描かれているかをみていく。

そして第三に、取り上げる教科書は、文革後の初級中学校（日本の中学校）で広く使用された人民教育出版社版に限った³⁾。その一覧が「資料 1」であり、現在までに八種類の発行が確認できている。

資料1「教科書一覧」人民教育出版社版初級中学用教科書『中国歴史』第4冊

- ①『全日制十年制学校初中課本（試用本） 中国歴史 第4冊』
中小学通用教材歴史編写組編著 1979年7月第1版
- ②『初級中学課本 中国歴史 第4冊』第1版
編者：李隆庚 審訂者：蘇寿桐 1982年6月第1版
- ③『初級中学課本 中国歴史 第4冊』第2版
編者：李隆庚 審訂者：蘇寿桐 1986年6月第2版
- ④『義務教育三年制・四年制初級中学教科書（実験本）中国歴史 第四冊』
人民教育出版社歴史室編著 1991年4月第1版
- ⑤『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史 第四冊』
人民教育出版社歴史室編著 1995年4月第2版
- ⑥『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史 八年級上册』
課程教材研究所歴史過程教材研究開発中心編著 2001年12月第1版
- ⑦『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史 第四冊』
人民教育出版社歴史室編著 2002年12月第1版

上記の教科書を検討した結果、内容的に①②，③，④⑤，⑥⑦の四グループに分けられることが判明した。つまり「抗日戦争」の記述について言えば、文革後の『中国歴史』教科書は1986年，1991年，2001年の三回にわたって大きな改訂が施されたわけである。

そこで本稿では各種「先行研究」⁴⁾の成果にも依拠しつつ、従来本格的に検討されることの無かった改訂問題、つまり三度の改訂の内容（何がどう変わっていったのか）、改訂の背景（なぜ変わったのか）について考察していく。

なお叙述の煩雑さを避けるために、教科書については一々書名を挙げずに、教科書③を【1986】，④を【1991】，⑥を【2001】など、出版年による表記を用いることとする。

2. 1986年の改訂について

— 教科書【1979】【1982】から【1986】へ —

文革後の教科書で、「抗日戦争」に関する記述が大きく変わるのは1986年のことである。教科書【1986】巻頭の「説明」には以下のように記されている。

この『初級中学課本 中国歴史 第四冊』は、1982年に、『全日制十年制学校初級課本（試用本） 中国歴史 第四冊』を基礎にして改訂した。今回はさらに同教科書中の抗日戦争部分に修訂を加えた。

この「説明」により、

【1979】『全日制十年制学校初中課本（試用本） 中国歴史 第四冊』

→ 【1982】『初級中学課本 中国歴史 第四冊』第1版

→ 【1986】『初級中学課本 中国歴史 第四冊』第2版

という流れで二度にわたる改訂が施されたこと、さらに【1986】においては「抗日戦争」部分を対象に修訂が施されたことが確認できる。

それではこの二回の改訂の内容はいかなるものだったのか。「説明」で修訂の事実が明記された【1986】のほか、【1982】においても「抗日戦争」の記述に変化がみられるのであろうか。この点を検討するために先ず【1982】の「目録（目次）」をみってみる。

資料2 教科書【1982】目録（「抗日戦争」部分）

第一章 全国抗日戦争的開始

第一節 盧溝橋事件和抗日民族統一戦線の形成

第二節 敵後抗日根拠地的建立

第二章 中国共産党堅持抗戰反对投降的闘争

第一節 反对国民党投降反共活動的闘争

第二節 保衛解放区艱苦闘争

第三節 四大家族の黒暗統治和国民党統治区的民主運動

第三章 抗日戦争の勝利

上記目次の網掛け部分、第一章第二節「敵後抗日根拠地的建立」が【1979】になかったものである。しかし教科書本文で確認すると、当該部分は【1979】の第一章後半部分と同じ内容であり、【1982】でひとつの「節」として独立させたにすぎない。これは構成上の問題であり内容に関わるものではない。

では内容的にはどうか。目立った変化だと言えるのは二点のみである。第一に、南京事件の被害者数の表記を、「一ヶ月余りで、殺害された者は三十万人を下らない」から「調査によれば、殺害されたのは総計三十万人あまりに達した」と変えた点、第二に戦争の「戦果」を数字を挙げて記述している点である。「8年間の抗戦を通じて、人民の軍隊は日本軍52万人以上、傀儡軍118万人以上を殲滅したのであった。この時、人民の軍隊はすでに120万人以上に発展し、解放した人口は1億人以上、解放区の面積は104平方キロメートルに達していた。」⁵³⁾

以上のように、語句の部分修正や図版の一部差し替えなどはみられるものの、【1979】と【1982】の間には大きな差異は認められない。両者は基本的に同一の教科書だと考えて差し支えないのである。

ところが【1986】の改訂では「抗日戦争」が対象となったために、それ以前の【1979】【1982】とは質量共に大きく変化する。まずは抗日戦争関係の頁数である。【1979】の34頁、【1982】の38頁から一挙に増えて54頁になり、第4冊総190頁の四分の一余りを「抗日戦争」関係の記述が占めることとなった。

次に内容の変化については「目次」が端的に示している。

資料3 教科書【1986】目録（「抗日戦争」部分）

第一章 全国抗日戦争の開始…92

第一節 盧溝橋事件和抗日民族統一戦線の形成

第二節 日軍全面進攻和国民党的抗戦

第三節 敵後抗日根拠地の建立

第二章 抗日戦争進入相持階段…111

第一節 日本侵略者对抗日根拠地進行“大掃討”

第二節 抗戦相持階段和国民党的反共活動

第三節 中国共産党堅持抗戦保衛解放区の闘争

第四節 国民党統治区の民主運動

第三章 抗日戦争的勝利…139

「日軍全面侵攻和国民党的抗戦」（第一章第二節）、「日本侵略者对抗日根拠地進行“大掃討”」（第二章第一節）というタイトルが示すように、【1986】改訂は日本軍糾弾の強化を際だった特徴としている。

この特徴を象徴するのが、南京事件についての記述である。比較するために【1982】と【1986】の関係部分を引用してみよう。

教科書【1982】p51 南京事件に関する記述

日本侵略軍はいたる所で焼き、殺し、奪うなど、残虐の限りをつくしたため、無数の都市と農村が廃虚と化し、何千万何百万の中国人民が殺された。日本軍は南京を占領した後、間違いじみた大虐殺を行った。南京で平和に暮らしていた住民は射撃練習の的にされ、銃剣の的にされ、石油で焼き殺され、生き埋めにされ、心臓をえぐりとられる者さえいた。調査によれば、殺された者は30万人余りに達し、焼かれたり壊されたりした家屋は全市の三分の一に達した。当時、南京城内には死体が累々と横たわり、瓦礫が山を成し、暗い冬の風がすさまじく吹きわたって、さながらこの世の地獄となった。敵の凶悪さ残虐さは、全国人民のたとえようのない激しい憤怒を呼び起こした。

教科書【1986】p98～99 南京事件に関する記述

日本侵略軍はいたる所で焼き、殺し、奪うなど、残虐の限りをつくしたため、無数の都市と農村が廃虚と化し、無数の中国人民が殺された。日本

軍は南京を占領した後、南京人民に対して6週間の長期にわたって人類史上かつてない血なまぐさい大虐殺を行い、最も恥ずべき罪を犯した。①
南京で平和に暮らしていた住民たちは、射撃練習の的にされ、銃剣の的にされ、生き埋めにされ、揚子江に追いつめられて溺れさせられ、心臓をえぐり取られ、その惨状は目を覆うばかりであった。

12月16日、日本軍は住民五千余人を下関中山埠頭に連行し機関銃で射殺した。

18日夜も、日本軍は幕府山に拘留していた住民とすでに武装解除された兵士五万七千人以上を下関草靴峡に駆り立て、まず機関銃の掃射をした後、まだ死んでいない人々を銃剣で刺し殺し、さらに石油をかけて死体を焼き、残った骨を全部揚子江に投げ捨てて、犯罪の証拠を湮滅した。②

調査によれば南京大虐殺において日本軍に殺害された中国人民は三十万以上に達し、三分の一の家屋が焼かれたり、壊されたりした。

当時、南京市内には死体が累々と横たわり、瓦礫が山を成し、暗い冬の風がすさまじく吹きわたって、さながらこの世の地獄となった。日本軍の凶悪さ残虐さは、中国人民のたとえようのない憤怒を呼び起こした。

このように【1986】では下線部が追加された結果、原文の字数で言うと、【1982】の200字に対して、【1986】では351字へと大幅な増加がみられる（【1979】では202字）。また、内容的にも住民虐殺に関する具体的な記述が増加すると共に（下線部②）、p99の全面を使って写真「南京大虐殺時に日本軍が中国民衆を生き埋めにした情景」2葉⁶⁾が新たに掲載されるなど、「人類史上かつてない血なまぐさい大虐殺」の再現が図られている。

【1986】はさらに、従来の教科書にはなかった残虐行為も取り上げる。「七三一（石井）部隊」を初めて取り上げて次のような詳細な説明を加えているのである。

日本軍は、中国占領の目的実現のために、中国で非人道的で残酷な細菌戦を展開した。「九一八」事変後、日本侵略軍は東北に細菌戦を専門に研

究する部隊（石井部隊、またの名を七三一部隊）を設立した。かれらは生きていた人間を使って実験するために、中国の軍人や民間人を連行していき、その人たちを「丸太」と呼び、実験材料として恣に人体実験を行った。たとえば細菌液を注射するとか、細菌を培養したものを飲食させるとか、さらにひどい場合は生体解剖を行う等の実験をして、三千名以上の人々を生きたまま虐殺したのである。こうして石井部隊はペスト菌、腸チフス菌、コレラ菌等を作り出し、寧波、常德地区と、晋察冀などの抗日根拠地の作戦で使用して、無数の中国軍人と民間人に悲惨な害毒をもたらした⁷⁾。

このような「残虐行為」と並行して【1986】ではまた、経済的侵略への糾弾も行う。これが新設第二章第一節「日本侵略者対抗日根拠地進行“大掃討”」の重要な内容であり、農地や農産物の収奪、鉱物資源の略奪、強制労働、過酷な税の取り立てを行ったこと、その結果物価高騰や大量の餓死者など深刻な被害をもたらしたことが記述されている。

そしてこれらの被害を総括して、「抗日戦争」部分の最後には、戦争の「戦果」とともに、【1982】までにはなかった「損害」についても以下のように記すのである。「中国人民は巨大な民族の犠牲を払い、八年間の抗戦で、中国軍と人民は2100万人以上の死傷者を出し（死傷者の総数には、遼寧・吉林・黒竜江・熱河・台湾の五省の統計が入っていない）、損失した財産は約600億元となる」⁸⁾。

以上のように【1986】では、日本軍の「罪業」を多角的な見地から取り上げて、日本が中国に与えた人的・経済的な損失を明らかにしていく。抗日戦争の被害の深刻さと、日本軍の残虐さに対する強調、これが【1986】改訂の大きな特徴であった。

それでは、1986年の時点で、「抗日戦争」のみを対象とする大改訂を行ったのは何故か。その理由として挙げられるのはまず、前年の1985年が「抗日戦争勝利40周年」にあたり、空前の規模で記念活動が展開されたという事実である。

たとえば現在、中国各地に点在する記念館、追悼碑はこの年に公開（あるいは建設）されたものが多いと言われ⁹⁾、「愛国主義教育模範基地」として名高い南京「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」、哈爾濱「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」が正式公開されたのも1985年（8月15日）であった。

歴史教科書の「抗日戦争」部分が改訂されたのは両記念館正式公開の翌年であり、しかも同教科書において「南京大虐殺」の記述は詳細且つ具体的になると共に、「七三一部隊」についても初めて言及されている。こうした事実を付き合わせてみれば両記念館の建設と教科書の改定とが全く無関係に行われたとは考えにくく、むしろ全国的に展開された記念活動の一環として（あるいは記念活動の「成果」を継承すべく）抗日戦争に関する教科書改訂も進められたと見る方が自然であろう。

また、同じ1985年には「靖国神社公式参拝問題」も起こっている。8月15日、かねてより公式参拝を表明していた中曽根首相が、神道形式を避けながらも供花料は公費で支出する公式参拝を行ったのである。中国政府は前日の14日に警告していたこともあって強く反発し、9月7日、自民党田中派訪中団と会見した彭真（全国人民代表大会常任委員長）は、「2000万人の犠牲者を出した」中国人に、「日本による残虐な殺戮行為の記憶を蘇らせる」行為だと、公式参拝を激しく非難した¹⁰⁾。また、北京大学構内には「抗日戦争勝利四十周年の日」に、日本の中曽根は深く反省しなかったばかりか、戦犯の亡霊をまつる靖国神社に参拝した。日本軍国主義は今まさに息を吹き返しつつある。これは平和に対する嘲りであり、中国人民に対する挑戦である、「東条が共栄圏を持ち出すとわが同胞2000万人が殺された。康弘また英機参拝に行く。中国はいつまで忍耐するのか」などの壁新聞も張り出された¹¹⁾。このように、1985年の中国は「公式参拝問題」に揺れた年でもあったのである。

さらに、翌1986年には、「日本を守る国民会議」編集の『新編高校日本史教科書』をめぐる「第二次教科書問題」が発生し、中国外交部スポークスマンの定例記者会見での批判（6月4日）、「中国外交部覚え書き」による修正要求（6月7日）などの事態を招いている。同教科書は日本が中国に対して行った

戦争の侵略性を否定するなど「日本と中国および朝鮮半島との間の歴史的関係について多くの問題のある記述を含んでいた」と言われている¹²⁾。

周知のように「歴史教科書」をめぐる問題は1982年に初めて起こった。同年6月、日本の新聞各紙の報道を契機にして文部省検定をめぐる「第一次教科書問題」が勃発し、「日本軍国主義が中国を侵略した事実を隠蔽」し、南京事件の原因も「中国軍隊が激しく抵抗し、日本軍が甚大な被害を蒙った為、憤慨した日本軍が多くの中国軍民を殺害」と改竄したという非難を中国から浴びたのである¹³⁾。

【1982】教科書の発行後、「第一次教科書問題」、「靖国神社公式参拝問題」、「抗日戦争勝利40周年」、「第二次教科書問題」など、「抗日戦争」の記憶を呼び起こす出来事が連続して起こっていたわけであり、このような状況の下で教科書【1986】の編纂と発行が進められたのであった。

3. 1990年代の改訂 — 教科書【1991】と【1995】 —

前章での検討から明らかなように【1986】教科書の内容には、抗日戦争勝利40周年という国内行事と共に、日本の教科書や靖国参拝が中国側の反発を招いたことが少なからず反映していたと推察される。

これに対して1990年代の改訂には天安門事件（1989年）や東欧・ソ連の崩壊（1989年～91年）が大きく関係している。それらを「社会主義体制」の深刻な危機と受け止めた指導者たちは、「教育改革」を軸にして体制立て直しを図ろうとしたからである。当時の「最高実力者」鄧小平は「動乱」の最大原因を教育の失敗に求め、「誤りは四つの原則の堅持そのものにあるのではなく、堅持するといってもあまり一貫しておらず、教育と思想・政治工作が極めて足りなかったことにある」、「われわれの最も大きな過ちは教育にあり、若い人、青年学生に村する教育が足りなかったことです」など、教育内容の根本的な見直しを要求する発言¹⁴⁾を繰り返している。

そうしたなか、中国近現代史教育の強化が「和平演変」¹⁵⁾の防護壁だとす

る「江沢民書簡」¹⁶⁾が発表され、歴史教科書の改編に決定的な影響を及ぼした。1991年3月9日付の同書簡は、「小学生から大学生に至るまで、中国近現代史および国情教育を揺るぎない姿勢で進めなければならない」と記した上で、歴史教育の重点項目として「アヘン戦争以来の百年以上にわたり中国人民が列強に欺かれ辱めを受けた」「この期間に多くの志のある者と大衆が生命を捧げ、外国の侵略と圧迫に立ち向かい、中華を守ろうとした」「中国共産党が土地革命戦争、抗日戦争、解放戦争を経て新中国を打ち立てた」「中国人民は侵略に反対し、正義を貫き、凶暴な敵を恐れず平和を守った。中国が社会主義制度を実現したのは、中国人民自身の歴史的な選択である」の四点が示された。この四項目を中心にした歴史教育の徹底により、「帝国主義列強への憎悪」「中華民族の誇り」「中国共産党への尊敬」「社会主義への信頼」を喚起させよというのである。

江沢民の指示は国家教育委員会によって直ちに実行に移されて、「中国歴史」の古代史分野と近現代史分野との授業配分がそれまでの5：5から、近現代史に重きを置く4：6へと変更された¹⁷⁾。また、小・中学校における近現代史教育の充実を促す二種の「綱要」、『中小学加强中国近代・現代史及国情教育的総体綱要（初稿）』¹⁸⁾、『中小学歴史学科思想政治教育綱要』¹⁹⁾もあいついで策定され、教育機関での早急な実施が図られた。

こうして1990年代の中国にあっては近現代史教育の必要性がなくなって強調されるようになり、「屈辱と栄光の近現代史」の象徴である「抗日戦争」の教育は一層重要度を増したのである。

以上を背景にして、【1986】を大改訂した教科書【1991】が誕生し、次に、「実験区」²⁰⁾での試用と調整を経て教科書【1995】が出版されるのである。なお、この二つの教科書には若干の異同が存在し、本来ならば両者の比較も行うべきであるが、紙幅の関係上ここでは「正本」である【1995】を使用して【1986】との対比を行っていく。

さて、教科書【1995】である。この教科書の特徴として挙げられるのはまず

「大型化」ということである。判型が【1986】のB 6版（横128mm縦182mm）からB 5版（横182mm縦257mm）になり、分量も190頁102,000字から224頁270,000字へと変わったからだ。字数だと実に2.5倍以上にも及ぶ大幅増である。

第二に、「愛国主義」の育成という教育目的が明記してある点である。序文（「説明」）では以下のように記す。「とりわけ中国近現代史教育と国情教育とに着手することによって、祖国、中国共産党、社会主義事業への熱愛、四つの基本原則や改革開放政策堅持に関する教育を実施することを重視して、本教科書を編集執筆した。」

第三に、視覚的効果を上げるために挿絵や地図などの図版資料を多用していることである。なかでも写真に変えて採用された二色刷の挿絵は時に写真よりも「生々しく」当時を再現し、より強烈な印象を与えるという効果を得ている。

以上三点を全体的特徴とする【1995】では「抗日戦争」をどのように取り扱っているか。日本指弾、国民党批判、共産党賛美の三本柱という基本構造は同じであるが、日本に関しては際だった変化がみられる。それは目次を見れば一目瞭然である。

資料4 教科書【1995】目録（「抗日戦争」部分）

- 第7課 神聖抗戦的開始
- 第8課 「到敵人後方去」
- 第9課 **日本侵略者の残暴統治**
- 第10課 国民党消極抗日積極反共
- 第11課 共産党堅持敵後抗戦
- 第12課 抗日戦争的勝利

上掲目次が示すように【1995】最大の変化は、第9課「日本侵略者の残暴統治（日本侵略者の残暴な支配）」の新設である。「日本の中国侵略政策の変化」「汪精衛傀儡政権の樹立」「残暴な支配」「野蛮な略奪」の四節からなる同課には、【1986】においては分散していた多数の「罪業」が収められ集中的に

批判されているからだ。

なかでも第三節「残暴的統治」、第四節「野蛮的略奪」では、合計5頁にわたって、日本の行った「残酷な支配」「野蛮な略奪」の実態が具に記述されている。このうち第三節「残暴的統治」においては「児童殺害」に初めて言及している。日本占領地で無辜な民衆に対する拷問や殺害が日常的に発生し、その被害者は老若男女を問わず、幼気な子供さえ犠牲になったというのである。

占領地域において日本の侵略者は銃剣を用いてその植民地支配を維持した。…略…。憲兵、警察、スパイがいたるところで悪事の限りを尽くし、中国人住民を思いのままに逮捕し、残酷な拷問にかけ、ひいては殺害した。「自分は中国人だ」と言っただけでも思想犯や政治犯になるような状況であり、占領地帯の人民はみな亡国の民のような危機に瀕した生活を送った。

11歳の子供黄継先は東北の東豊県城に暮らしていた。ある時日本兵が彼に「日本と中国どちらがいいか」と尋ねた。彼は答えた。「僕のお父さんが言ったよ。日本人に会ったら日本がいいと言ってるね。でも本当は中国の方がいいし、日本は僕たちの敵なんだ」。日本兵はこれを聞くや、すぐに銃剣でかれを殺してしまった²¹⁾。

第四節「野蛮的略奪」では「万人坑」を初めて取り上げて、髑髏のアップや白骨死体の並ぶ挿絵入りで説明を加えている。

中国の石炭を最大限に略奪するために、日本の侵略者は「人を以て石炭に代える」という罪深い手段を惜しまずに採用し、銃剣や革の鞭で炭坑夫たちを脅し、毎日15、16時間も働かせた。坑道には安全施設が何もなく、死傷事故が頻発し、平均して200トンの石炭が掘られるごとに一人の中国人坑夫が過労死した。さらに日本の侵略者は、血や汗を搾り取られて労働する力をなくした坑夫たちを大量に荒野に放置し、無惨にも餓死させて、白骨が累々と続く「万人坑」にかえた。大同炭坑の付近には20余りの「万人坑」がある²²⁾。

さらに、日本の侵略は「血なまぐさい弾圧」のほか「文化面」にも及んだという。その例としてあげられたのが「奴隷化教育」という問題である。

血なまぐさい弾圧とともに、日本の侵略者はまた奴隷化教育を強力に押し進め、占領地帯の人民の民族意識を踏みにじり、中華民族の文化や伝統を破壊し、中国人民が甘んじて亡国の民になるように企んだ。

日本帝国主義は学校を通じて青少年に対して奴隷思想を教え込み、いわゆる「中日親善」や「共存共栄」などの誤った理屈を宣伝した。同時に日本語を必修の「国語」科として定め、占領地帯の各種の学校で強制的に教え、日本語を用いて中国人民を同化しようともくろんだ²³⁾。

こうした「文化面」から日本の侵略を問題にすることも以前の教科書ではみられなかったことであり、【1995】の特徴のひとつである。

それでは【1986】教科書との重複部分についてはどうか。まず目につくのは視覚的効果を狙って挿絵が多用されているという事実である。たとえば「七三一部隊」については「細菌生体実験」などの挿絵三点（「日本侵略者正在対健康的中国人作細菌試験」「日本石井部隊焚燒被害者屍体的煉人炉」「日本石井部隊製造的細菌炸彈」）が新たに掲載された（p66）。

また、本文部分にはほとんど変更が認められないものの、「七三一部隊」に関する「練習問題」を新たに設けて記憶の定着を図ろうとしている。69頁の穴埋め問題がそれである。「日本が中国を侵略していた時期、日本の侵略者は中国の（ ）に細菌戦を研究する部隊を設立したが、その部隊を（ ）と呼んだ。かれらはあることか生きた人間を使って実験をし、数多くの中国人を殺した」²⁴⁾。

このように第9課では、占領地域での「拷問」「児童殺害」「生体実験」「毒ガス使用」「日本語の強要」、金（きん）や現金の収奪、銀行・鉄鉱企業・炭坑などの接收、農地・農産物・食料の収奪、強制連行、強制労働、万人坑…など多種多様な事例を集め、挿絵や練習問題も活用しながら、日本の「残酷な支配」「野蛮な収奪」を浮き彫りにしようとしているのである。

この9課以外で注目されるのはやはり「南京大虐殺」の描写である。【1986】と比べると幾つかの相違点が確認できるからであり、特に本文には「百人斬り」事件の追加など大きな加筆訂正が加えられている。

南京大屠殺 日本侵略軍はいたる所で焼き、殺し、奪うなど、残虐の限りをつくした。日本軍は南京を占領した後、血なまぐさい大虐殺を行い、最も恥ずべき罪を犯した。南京で平和に暮らしていた住民は射撃練習の的にされ、銃剣の的にされ、生き埋めにされた。戦後の極東国際軍事裁判所の統計によると、日本軍が南京を占領した六週間で、無抵抗な住民と武器を放棄した軍人など三十万人以上が虐殺された。

1937年12月15日、すでに武器を放棄した中国軍兵士と警察官の三千人余りが、日本軍によって南京漢中門外まで護送され、機銃掃射を浴びた。その後、まだ息のある負傷者は死者といっしょに焼き払われた。

16日、中国人の難民五千人余りが集団で南京中山埠頭に連行され、両手を後ろ手に縛られ整列させられたのち機銃掃射を浴び、死体は長江に捨てられた。生き延びたのはわずかに二人だけであった。

17日、日本軍は南京幕府山で捕えた五万七千人余りの老若男女全員を針金で縛り、下関草靴峡まで駆り立てて機銃掃射を浴びせた。血の海の中で呻きあがいている者を銃剣で刺し殺し、最後に全死体を焼き払った。難を逃れたのは一人だけだった。

12月、日本の『東京日々新聞』は「紫金山の麓」という題で、次のようなニュースを報道した。「日本軍少尉の向井と野田は百人斬り競争を行い、野田は105人、向井は106人を殺した。しかしどちらが先に百人に達したのか分からないので勝負をつけがたく、改めてどちらが先に150人の中国人を殺せるかを賭けることになった²⁵⁾。（下線部は引用者。）

下線部が増補・修正された箇所であり、大幅な修訂がなされたことが分かる。

その特徴は日付の明記や日本の新聞記事からの引用、殺し方の生々しい描写などにあり、それによって主張の根拠付けを図ると共に事件の残虐性や被害の甚大さを一層強調するのである。

「南京大虐殺」に関してはこれ以外にも変化が指摘できる。第一に、ゴシック文字で本文中に「南京大虐殺」という見出しを付けたこと、第二に「七三一部隊」同様に不気味な挿絵「日本軍は南京で中国青年を銃剣の的にした」「日本軍が南京で殺人の後、刀の血痕を拭う」²⁶⁾を掲載したこと、第三に穴埋め問題「() 万人以上にもよる無抵抗な中国住民を虐殺した」²⁷⁾を新設したことである。

練習問題の正解は「30」万人以上であるが、この犠牲者数については『教師教学用书(教師用指導書)』で次のような指示が与えられている。

「南京大虐殺」は、血が滴る事実によって、日本帝国主義が発動した中国侵略戦争の残酷さと野蛮さを白日の下にさらしている。教室に於いて教師は、小文字で書かれている日本軍による暴行を学生が真剣に読むよう指導し、日本帝国主義に対する深く大きな恨みを心に刻みつけさせねばならない。「南京大虐殺」の起こった期間と、日本軍によって殺害された中国軍人と人民との数を記憶するよう生徒に要求しなければならない²⁸⁾。

この記述から分かるように、「南京大虐殺」の学習目的は、「野蛮」で「残酷」な侵略に対する「深く大きな恨みを刻みつけ」ることにある。そのため【1995】教科書では、見出し、挿絵、練習問題なども使い、【1986】よりもさらに詳細な紹介がなされており、中国の中学生はこれらを「真剣に」学んで、事件の期間や犠牲者たちの人数の記憶に励むのである。

以上のように、1995年改訂の主要な特徴として、第9課「日本侵略者の残暴な支配」を特設して種々の具体例を集中的に提示していること、「野蛮で残酷な侵略」の象徴である「南京大虐殺」については一層具体的で詳細な情報が提供されていること、生々しい挿絵を多用して視覚的效果も高めていること、の

三点を挙げることができる。その結果、「凶悪残酷を特質として、中国を大規模に侵略した日本帝国主義」²⁾⁹⁾ に対する批判が一層強まることとなったのである。(以下次号)

注 釈

- 1) 中学校を例にとつて言えば、中国の歴史教科書は「中国歴史」4冊と「世界歴史」2冊の二種類あり、前者を一年生から二年生までの二年間、後者を三年生の一年間で学習する。
- 2) たとえば人民教育出版社『中国歴史』第四冊の1979年版、1982年版、1986年版では「抗日戦争」の起点を1937年の「盧溝橋事変」とするが、2001年版の第四単元「神聖的抗日戦争」は1931年「九一八事変」を起点としている。ちなみに日本では前者を「日中戦争」、後者を「十五年戦争」と呼ぶ。なお、「抗日戦争」の起点と呼称の問題に関しては『岩波 現代中国語事典』(岩波書店 1999年) p 993~995「日中戦争 [抗日戦争]」に整理された叙述が見られる。
- 3) 人民教育出版社版は建国以来、長期にわたって唯一の「国定教科書」であったし、複数教科書制へ移行した1980年代後半以後も広範な地域で採用されている。特に本稿で取り上げた1995年版は、手持ち分だけでも北京、遼寧、広東などの地域で「重印」されていることが確認できており、その使用が広範囲に及んでいることが分かる。
- 4) 教科書【1979】と教科書【1995】には日本語訳があり、本論で紹介できなかった記述や挿絵などはこれらを参照されたい。なお、本文中の訳文はこれらに依るところが多いが、最終的な責任は引用者にある。

また、教科書問題や反日デモなど日中間の「軋み」が度々発生するなかで、中国の歴史教科書に対する関心も高まり、批判も含めた様々な論考や紹介などが多数出現している。

A. 中国「歴史教科書」の翻訳

- ①『世界の教科書 歴史 中国2』(中国研究所監訳 野原四郎/齋藤秋男編訳 ほるぷ出版 1981年11月 【1979】の翻訳)

②『世界の教科書シリーズ⑤ 入門 中国の歴史 中国中学校歴史教科書』（小島晋治・並木頼寿監訳 明石書店 2001年11月 【1995】の翻訳）

B. 中国「歴史教科書」の一部翻訳・紹介・研究

①『中国の教科書の中の日本と日本人』（関根謙編 一光社 1988年8月）

②『対訳 世界の教科書にみる日本 中国編』（国際教育情報センター 1994年）

③『日本と中国』（中嶋嶺雄編著 東京書籍 1992年）

④『別冊宝島「中国・韓国の歴史教科書」に書かれた日本』（別冊宝島編集部編 宝島社 2005年7月）

⑤『韓国・中国「歴史教科書」を徹底批判する』（藤岡寛次著 小学館文庫 2001年）

⑥『日中再考』（古森義久著 産経新聞社 2001年）

⑦『北京大学超エリートたちの日本論 衝撃の「歴史認識」』（工藤俊一著 講談社+α新書 2003年）

⑧『日中韓の歴史認識』（浦野起央著 南窓社 2002年）

⑨『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか 日・中・韓・台の歴史教科書の比較から』（中村哲編著 日本評論社 2004年）

⑩『現代中国の教育』（王智新著 明石書店 2004年）

⑪「鏡としての歴史教育 中国歴史教科書の中の日本像」（趙軍著 『駒沢女子大学紀要』4号 1997年12月）

⑫抽稿「中国『歴史教科書』における日本人—『日清戦争』と『南京事件』」（『中国文芸研究会会報250期記念号』 2002年9月）

⑬抽稿「中国『歴史教科書』の描く日本人」（『経済・文化 アジアネット21活動報告集』2 2002年10月）

⑭抽稿「中国版『新しい歴史教科書』の『新しさ』」（愛媛大学人文学会『人文学論叢』5号 2003年12月）

5) 教科書【1982】「抗日戦争的勝利」p129~130。

6) 教科書【1986】で新たに掲載された二枚の写真は南京「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」や、写真集『侵華日軍南京大屠殺暴行照片集』（中国第二歴史档案馆・南京市档案馆・南京大屠殺史料編集委員会 1992年）に展示・掲載されるなど、「南京

大虐殺の鉄証（揺るがぬ証拠）」として度々使用される有名な写真である。

- 7) 教科書【1986】「国民党戦場継続抗戦和敗退」 p119
- 8) 教科書【1986】「抗日戦争の勝利」 p144～145
- 9) 『中国はなぜ「反日」になったか』（清水美和著 文春新書 2003年5月）
- 10) 『原典中国現代史 日中関係』（安藤正士・小竹一彰編 岩波書店 1994年12月）
- 11) 同前書及び「日中関係の歴史」（『現代中国への道案内』白帝社2002年4月所収）
- 12) 同前
- 13) 同前
- 14) 鄧小平「在接見首都戒嚴部隊軍以上幹部時的講話」（1989年6月9日）、「我們有信心把中国的事情做得更好」（1989年9月16日）。引用は『鄧小平文選1982-1992』（東和文化研究所・中国外文出版社共同出版 1995）による。
- 15) 社会主義国家内の反対勢力と結託し、政治・経済・文化の各領域に影響を及ぼして、武力に因らず社会主義政権を転覆させること。1980年代末から90年代にかけて中国共産党が主張した。（『岩波 現代中国事典』p1339「和平演変」より）
- 16) 「江沢民総書記致信李鉄映何東昌強調進行中国近代史現代史及国情教育使小学生中学生大学生認識人民政權来之不易，提高民族自尊心自信心」（1991年3月9日 正式公開は『人民日報』1991年6月1日）
- 17) 「九年義務教育全日制初級中学歴史教学大綱（試用）」（1991年）「教材的按配」。
- 18) 『中小学加強中国近代・現代史及国情教育的総体綱要（初稿）』（1991年8月27日公示 『中国教育年鑑1992』所収）。小中学校の各教科「歴史」「地理」「語文（国語）」「思想政治」で共通して扱うべき学習項目を示した文献。日本軍の侵略の実態に関するものだけを拾うと、「凶悪残酷を特質として、中国を大規模に侵略したのが日本帝国主義である」としたうえで、「南京大虐殺」「王精衛傀儡政権の育成」「抗日根拠地を対象にした“大掃討”と“三光作戦”」「占領地域での略奪、迫害、奴隸化政策」などの学習項目を示している。
- 19) 『中小学歴史学科思想政治教育綱要』（中華人民共和国国家教育委員会制定 1991年8月）。前出「総体綱要」に基づき「歴史教科」の学習内容を具体的に定めており、歴史教科書編纂の重要な根拠文献である。抗日戦争関係では、「南京大虐殺」のほか

「抗日根拠地を対象にした“封鎖（囚籠）”政策」「占領地帯での経済的略奪、人民に対する虐殺」「農産物と工業・炭坑企業の収奪」「潘家峪惨殺事件」「晋察冀解放区への掃討」「岡村寧次の太原における罪業」などの項目が並んでいる。これらの多くは以前の教科書でも論及されているものの、「封鎖政策」とそこにおける人民への抑圧虐待、潘家峪惨殺事件、奴隸化教育などは新しく付加された学習項目である。

- 20) 中国の教科書は「実験区」と呼ばれる都市や地域で一定期間試用され、関係者の意見を聴取しながら内容を調整し、正式出版されることが多い。この試用版教科書は「試用本」「実験本」と称される。
- 21) 教科書【1995】「残暴的統治」p65 「児童殺害」に関する説明より。
- 22) 教科書【1995】「野蛮的略奪」p68 「万人坑」に関する説明より。
- 23) 教科書【1995】「残暴的統治」p67 「奴化教育」に関する説明より。
- 24) 教科書【1995】p69「練習題二，填空（穴埋め）」
- 25) 教科書【1995】「南京大屠殺」p54
- 26) 教科書【1995】「南京大屠殺」p54「日軍在南京以中国青年作拚刺刀的靶子」「日軍在南京殺人后拭去屠刀上的血迹」。
- 27) 教科書【1995】p55「練習題二，填空」
- 28) 『九年義務教育三年制初級中学 中国歴史第四冊 教師教学用書』（人民教育出版社 歴史室編著 人民教育出版社 1995年5月第2版）p69「教学要求和建議 一、本課重点」
- 29) 『中小学加強中国近代・現代史及国情教育的総体綱要（初稿）』（前掲18）。

【付記】

本稿は平成17年度「愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費」に基づく研究成果の一部である。